

Cisco UCS Director リリース 6.5 アップグレードガイド

初版 : 2017 年 07 月 11 日

Cisco UCS Director のリリース 6.5 へのアップグレード

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードの概要

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードプロセスは、システムにインストールされているソフトウェアの現在のバージョンによって異なります。サポートされているアップグレードパスの詳細については、[Cisco UCS Director リリース 6.5 へのサポートされているアップグレードパス](#)、(1 ページ) を参照してください。

Cisco UCS Director リリース 6.5 は、仮想マシン (VM) の 2 つのディスクにインストールされます。1 つのディスクは、オペレーティングシステムと Cisco UCS Director アプリケーションをホストします。2 番目のディスクは、Cisco UCS Director データベースをホストします。[Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードに関する前提条件](#)、(4 ページ) を参照してください。

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのサポートされているアップグレードパス

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのサポートされているアップグレードパスは、以下のとおりです。

リリース 6.0(0.0) プラットフォームからのアップグレードパス

- リリース 6.0(1.2) からリリース 6.5(0.0) へ
- リリース 6.0(1.1) からリリース 6.5(0.0) へ
- リリース 6.0(1.0) からリリース 6.5(0.0) へ
- リリース 6.0(0.1) からリリース 6.5(0.0) へ
- リリース 6.0(0.0) からリリース 6.5(0.0) へ

リリース 5.5(x.x) プラットフォームからのアップグレードパス

リリース 5.5(x.x) からリリース 6.5(0.0) への直接アップグレードはサポートされていません。最初に 6.0(x.x) リリースにアップグレードする必要があります。

- リリース 5.5(0.1) からリリース 6.0(x.x) へ、次にリリース 6.5(0.0) へ

- リリース 5.5(0.0) からリリース 6.0(x.x) へ、次にリリース 6.5(0.0) へ

以前のリリースからのアップグレードパス

リリース 6.0(x.x) より前のバージョンからリリース 6.5(0.0) への直接アップグレードはサポートされていません。次のいずれかのアップグレードパスを使用する必要があります。

- リリース 5.4.x バージョンを使用しているユーザは、まずリリース 5.5 またはリリース 5.5(0.1) にアップグレードしてから、リリース 6.0(x.x) にアップグレードし、その後リリース 6.5(0.0) にアップグレードします。
- 5.4 バージョンより前のバージョンを使用しているユーザは、まず 5.4 バージョンに移行してから、リリース 5.5 またはリリース 5.5(0.1) にアップグレードし、その後リリース 6.0(x.x) にアップグレードして、リリース 6.5(0.0) にアップグレードします。

デジタル署名されたイメージ

Cisco UCS Director イメージは、デジタル署名された ZIP ファイルで配信されます。これらの署名された ZIP ファイルは、次のものを含むコンテナ ZIP ファイルにラップされます。

- デジタル署名された ZIP ファイル：Cisco UCS Director のインストールまたはアップグレードイメージが含まれています。
- 検証プログラム：証明書チェーンと署名を確認します。証明書チェーンの検証中に、プログラムはシスコの SubCA 証明書とルート CA 証明書を使用してエンドエンティティ証明書の信頼性を確認します。その後、認証されたエンドエンティティ証明書を使用して署名を確認します。
- デジタル署名ファイル：インストールまたはアップグレード前に確認できる署名が含まれています。
- 証明書ファイル：デジタル署名を確認できます。このシスコ署名 x.509 エンドエンティティ証明書には、署名の確認に使用できる公開キーが含まれています。この証明書は、<http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer> に掲示された Cisco ルートにチェーンされています。
- ReadMe ファイル：デジタル署名された ZIP ファイルを確認するために必要な情報と手順を提供します。

イメージはオフラインで確認します。イメージを確認したら、Cisco UCS Director インストールまたはアップグレードを開始できます。



- (注) リリース 6.5 にアップグレードする場合、パッチのデジタル署名を手動で確認し、[パッチの適用 (Apply patch)] オプションを使用してアップグレードできます。[デジタル署名されたイメージの確認](#)、(3 ページ) を参照してください。

デジタル署名されたイメージの確認の要件

Cisco UCS Director のデジタル署名されたイメージを確認する前に、ローカルマシンに次があることを確認します。

- 検証プロセス中の <https://www.cisco.com> への接続
- Python 2.7.4 以降
- OpenSSL

デジタル署名されたイメージの確認

はじめる前に

[Cisco.com](https://www.cisco.com) から Cisco UCS Director イメージをダウンロードします。

ステップ 1 [Cisco.com](https://www.cisco.com) からダウンロードしたファイルを解凍し、次のファイルが含まれていることを確認します。

- ReadMe ファイル
- デジタル署名された ZIP ファイル (CUCSD_6_5_0_0_65365_VMWARE_GA.zip、CUCSD_6_5_0_0_65717_HYPERV_GA.zip、cucsd_patch_6_5_0_0_65365.zip など)
- 証明書ファイル (UUCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer など)
- イメージ用に生成されたデジタル署名 (CUCSD_6_5_0_0_65365_VMWARE_GA.zip.signature、CUCSD_6_5_0_0_65717_HYPERV_GA.zip.signature、cucsd_patch_6_5_0_0_65365.zip.signature など)
- 署名検証プログラム (cisco_x509_verify_release.py など)

ステップ 2 ReadMe ファイルの手順を確認します。

(注) 次の手順と ReadMe の手順に違いがある場合は、ReadMe の手順に従ってください。

ステップ 3 署名検証プログラムを実行します。

例：アップグレードパッチの署名の検証

```
python cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer  
-i cucsd_patch_6_5_0_0_65365.zip -s cucsd_patch_6_5_0_0_65365.zip.signature -v dgst -sha512
```

例：VMware OVF インストールの署名の検証

```
python cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer  
-i CUCSD_6_5_0_0_65365_VMWARE_GA.zip -s CUCSD_6_5_0_0_65365_VMWARE_GA.zip.signature -v dgst -sha512
```

例：Hyper-V VHD インストールの署名の検証

```
python cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer  
-i CUCSD_6_5_0_0_65717_HYPERV_GA.zip -s CUCSD_6_5_0_0_65717_HYPERV_GA.zip.signature -v dgst -sha512
```

ステップ 4 出力を確認し、検証が成功したことを確認します。

例：アップグレードの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of cucsd_patch_6_5_0_0_65365.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

例：VMware OVF インストールの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of CUCSD_6_5_0_0_65365_VMWARE_GA.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

例：Hyper-V VHD インストールの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of CUCSD_6_5_0_0_65717_HYPERV_GA.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

次の作業

Cisco UCS Director をインストールまたはアップグレードします。

Cisco UCS Director のアップグレード

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードに関する前提条件

現在の Cisco UCS Director ソフトウェアをリリース 6.5 にアップグレードする前に、次の前提条件を満たします。

メンテナンス期間を計画する

リリース 6.5 にアップグレードする場合、アップグレード中はすべての Cisco UCS Director サービスを停止する必要があります。2～4 時間のメンテナンス期間を計画することをお勧めします。アップグレードする前、メンテナンス期間の長さはデータベースのサイズによって異なります。

Multi-Node 設定の場合、ノードの一部を並行してアップグレードすることによって、メンテナンス期間を短縮できます。[Multi-Node 設定のリリース 6.5 へのアップグレード](#)、(8 ページ) を参照してください。

Cisco UCS Director リリース 6.5 をダウンロードし、署名されたイメージを確認する

Cisco UCS Director リリース 6.5 ソフトウェア パッチを <http://www.cisco.com> からダウンロードし、デジタル署名されたイメージを確認します。 [デジタル署名されたイメージ](#)、(2 ページ) を参照してください。

確認したリリース 6.5 ソフトウェア パッチをサーバに配置する

アップグレードのインストールに使用する FTP または HTTP のサーバにリリース 6.5 ソフトウェア パッチを配置します。

カスタム スクリプトを分析し、互換性を確保する

既存の Cisco UCS Director リリース 6.0(x.x) の展開にカスタム タスクが含まれている場合は、Custom Task Script Analyzer をダウンロードして実行します。アナライザはタスクを実行せずに Cisco UCS Director データベースのすべてのカスタム スクリプトを評価し、カスタム タスクの分析レポートを出力します。

レポートが互換性の問題を示している場合は、アップグレードを完了する前にリリース 6.0(x.x) システムでこれらの問題を解決します。 [カスタム タスクのアップグレード](#)、(14 ページ) を参照してください。

現在の Cisco UCS Director VM のスナップショットを作成する

アップグレードを開始する前に、現在の Cisco UCS Director VM のスナップショットを取得しておくことをお勧めします。VM のスナップショットを取得する前に、サービスと OS がグレースフルにシャットダウンされ、VM の電源がオフの状態であることを確認します。取得しておくこと、FTP サーバから既存の設定データベースをバックアップする必要はありません。

2 番目の仮想ディスクを Cisco UCS Director VM に追加する

Cisco UCS Director リリース 6.5 では、VM の 2 番目のディスクにデータベースがインストールされます。アップグレードを開始する前に、このディスクを作成することをお勧めします。最初にディスクを作成しない場合、作成を完了するまでアップグレードが停止されます。

スタンドアロン設定では、メインアプライアンスの VM に 2 番目の仮想ディスクを追加します。Cisco UCS Director Bare Metal Agent VM に対して 2 番目のディスクを追加する必要はありません。

Multi-Node 設定では、次のノードに 2 番目の仮想ディスクを追加します。

- インベントリ データベース ノード
- モニタリング データベース ノード

2 番目のディスクを追加するには、ハイパーバイザ マネージャで次の手順を実行します。

- 1 Cisco UCS Director VM の電源をオフにします。
- 2 最小要件を満たす VM に 2 番目のディスクを追加します。 [データベース ディスクの要件](#)、(6 ページ) を参照してください。現在のデータベースのサイズがわからない場合は、ShellAdmin で [パッチの適用 (Apply patch)] を選択した後、アップグレードでその情報が表示されます。

3 Cisco UCS Director VM の電源を入れます。

データベース ディスクの要件

アップグレードする前に 2 番目の仮想ディスクを Cisco UCS Director に追加する際に、ディスクが次の要件を満たしていることを確認します。これらの要件は、VMware vSphere または Microsoft Hyper-V のいずれかでホストされる Cisco UCS Director VM に適用されます。



- (注) 2番目のディスクの追加のみを行う必要があります。リリース6.5のアップグレードによって、フォーマット、データベースのインストール、およびそのディスクのデータ転送が処理されません。

要素	要件
ディスク サイズ (Disk Size)	<p>2番目のディスクの推奨サイズは、現在の Cisco UCS Director データベースのサイズの2倍です。</p> <p>2番目のディスクの最小サイズは、現在の Cisco UCS Director データベースのサイズの1.5倍です。2番目のディスクが最小値より小さい場合、アップグレードは失敗します。</p> <p>たとえば、現在の Cisco UCS Director データベースのサイズが80GBの場合、データベースディスクは160GBにすることをお勧めします。最小サイズは120GBです。</p> <p>[サービス ステータスの表示 (Display Service Status)] オプションを使用して、関連するすべてのデータベースとディスクのステータスを確認できます。現在のデータベースのサイズがわからない場合、アップグレード手順で情報が提供されます。</p>
データストア	<p>高性能データストア。</p> <p>最適なパフォーマンスを実現するには、データストアは読み書き両方の操作について1,200以上の最小IOPSをサポートする必要があります。データストアが遅い場合、Cisco UCS Director のパフォーマンスに直接影響します。</p>
ディスクの種類	シリアル接続された SCSI (SAS) ディスク
ディスクの書式設定	シック プロビジョニング (Lazy Zeroed) フォーマット

Single Node 設定のリリース 6.5 へのアップグレード

はじめる前に

Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードに関する前提条件、(4 ページ) のすべての前提条件を満たす必要があります。

-
- ステップ 1** Cisco UCS Director ShellAdmin にログインします。
- ステップ 2** すべてのサービスが実行されていることを確認するには、[サービスのステータスを表示 (Display services status)] を選択します。
アップグレード手順を開始する前に、すべてのサービスが実行されている必要があります。必要に応じて、[サービスの開始 (Start services)] を選択してから、すべてのサービスが実行されていることを確認します。
- ステップ 3** Cisco UCS Director をリリース 6.5 にアップグレードするには、[パッチの適用 (Apply patch)] を選択します。
- ステップ 4** 「パッチを適用する前にサービスを停止します。続行しますか[y/n]。 (Services will be stopped before applying patch. Do you want to continue [y/n]?) 」で、y を入力します。
すべてのサービスが停止すると、アップグレードが続行されます。
- ステップ 5** 「パッチを適用する前にデータベースのバックアップを作成しますか[y/n]。 (Do you want to take database backup before applying patch [y/n]?) 」プロンプトで、次のいずれかを入力します。
- y : Cisco UCS Director データベースのバックアップを作成する場合。
 - n : 開始する前に VM のスナップショットを作成しており、追加のバックアップを作成しない場合。
- ステップ 6** パッチの URL を入力するよう求められた場合は、リリース 6.5 パッチの場所を入力し、Enter を押しします。
たとえば、パッチ ファイルを FTP サーバに保存した場合は、次のように入力します。
ftp://username:password@hostname|IP_address/software_location_and_name
- ステップ 7** パッチ ファイルが Cisco UCS Director VM にダウンロードされるまで待ちます。
アップグレードの前に 2 番目のディスクを追加していないためにダウンロード後にパッチのインストールが失敗した場合は、ハイパーバイザ マネージャで次の手順を実行します。
- 1 Cisco UCS Director VM の電源をオフにします。
 - 2 最小要件を満たす VM に 2 番目のディスクを追加します。データベースディスクの要件、(6 ページ) を参照してください。現在のデータベースのサイズがわからない場合、アップグレードメッセージで情報が提供されます。
 - 3 Cisco UCS Director VM の電源を入れます。
- 2 番目のディスクを追加したら、このアップグレード手順をステップ 1 から繰り返します。

ステップ 8 パッチ アップグレードが完了するまで待ちます。
アップグレード プロセスでは、以下を含む追加の手順が実行されます。

- パッチ ファイルの解凍。
- リリース 6.5 ファイルのインストール。
- 2 番目のデータベース ディスクのフォーマット。
- 既存のデータベースの新しいディスクへのコピー。
- データベース スキーマの初期化。
- Cisco UCS Director アプライアンスのリブート。Cisco UCS Director サービスが自動的に開始します。

データベースのサイズによっては、アップグレードプロセスの完了に数分かかることがあります。

(注) すべての Cisco UCS Director サービスが開始し、Cisco UCS Director が利用可能になり、ログイン画面が表示されて管理者が Cisco UCS Director にログインできるようになるまでは、パッチプロセスは完了または成功しません。

追加パッチの適用、データベースのバックアップ、バックアップからのデータベースの復元など、すべての Cisco UCS Director サービスは他の ShellAdmin プロシージャを実行する前に開始されている必要があります。

ステップ 9 アップグレードが完了したら、Cisco UCS Director ShellAdmin のバージョンとビルドが Cisco.com からダウンロードしたパッチのバージョンとビルドと一致することを確認します。
バージョンとビルドは次の場所で確認できます。

- シェル メニューのタイトルの下
- ShellAdmin の [バージョンの表示 (Show Version)] オプション

Multi-Node 設定のリリース 6.5 へのアップグレード

はじめる前に

[Cisco UCS Director リリース 6.5 へのアップグレードに関する前提条件](#)、(4 ページ) のすべての前提条件を満たす必要があります。

ステップ 1 プライマリ ノードとすべてのサービス ノードで Cisco UCS Director ShellAdmin にログインします。

ステップ 2 プライマリ ノードとすべてのサービス ノードですべてのサービスが実行されていることを確認するには、[サービスのステータスを表示 (Display services status)] を選択します。
アップグレード手順を開始する前に、すべてのサービスが実行されている必要があります。必要に応じて、[サービスの開始 (Start services)] を選択してから、すべてのサービスが実行されていることを確認します。

- ステップ 3** プライマリ ノードとすべてのサービス ノードで [サービスの停止 (Stop services)] を選択し、ノードのすべてのサービスが停止したことを確認します。
インベントリ データベース ノードとモニタリング データベース ノードをアップグレードする前に、プライマリ ノードとサービス ノードですべてのサービスが停止していることを確認します。
- ステップ 4** インベントリ データベース ノードとモニタリング データベース ノードの ShellAdmin で [パッチの適用 (Apply patch)] を選択して、ノードをリリース 6.5 にアップグレードします。
- ステップ 5** 「パッチを適用する前にサービスを停止します。続行しますか [y/n]。 (Services will be stopped before applying patch. Do you want to continue [y/n]?) 」 で、y を入力します。
データベース ノードですべてのサービスが停止すると、アップグレードが続行されます。
- ステップ 6** 「パッチを適用する前にデータベースのバックアップを作成しますか [y/n]。 (Do you want to take database backup before applying patch [y/n]?) 」 プロンプトで、次のいずれかを入力します。
- y : Cisco UCS Director データベースのバックアップを作成する場合。
 - n : 開始する前に VM のスナップショットを作成した場合。
- ステップ 7** パッチの URL を入力するよう求められた場合は、リリース 6.5 パッチの場所を入力し、Enter を押しします。
たとえば、ソフトウェア パッチを FTP サーバに保存した場合は、次のように入力します。
ftp://username:password@hostname|IP_address/software_location_and_name
- ステップ 8** パッチが Cisco UCS Director VM にダウンロードされるまで待ちます。
インベントリ データベース ノードとモニタリング データベース ノードに 2 番目のデータベース ディスクを追加していないためにダウンロード後にパッチのインストールが失敗した場合は、ハイパーバイザ マネージャで次の手順を実行します。
- 1 Cisco UCS Director VM の電源をオフにします。
 - 2 最小要件を満たす VM に 2 番目のディスクを追加します。 [データベース ディスクの要件](#)、(6 ページ) を参照してください。現在のデータベースのサイズがわからない場合、アップグレード メッセージで情報が提供されます。
 - 3 Cisco UCS Director VM の電源を入れます。
- データベース ディスクを追加したら、このアップグレード手順をステップ 1 から繰り返します。
- ステップ 9** パッチ アップグレードが完了するまで待ちます。
アップグレード プロセスでは、以下を含む多くの手順が実行されます。
- パッチ ファイルの解凍。
 - リリース 6.5 ファイルのインストール。
 - 2 番目のデータベース ディスクのフォーマット。
 - 既存のデータベースの新しいディスクへのコピー。
 - データベース スキーマの初期化。

- Cisco UCS Director アプライアンスのリポート。Cisco UCS Director サービスが自動的に開始します。

データベースのサイズによっては、アップグレードプロセスの完了に数分かかることがあります。

ステップ 10 ShellAdmin で、[サービスのステータスを表示 (Display services status)] を選択し、モニタリング データベース ノードとインベントリ データベース ノードですべてのデータベース サービスが開始していることを確認します。

必要に応じて、[データベースの起動 (Start Database)] オプションを選択して、データベース ノードでサービスを開始できます。

ステップ 11 上記の手順で説明したように、[パッチの適用 (Apply patch)] オプションを使用してサービス ノードをアップグレードします。

ステップ 12 上記の手順で説明したように、[パッチの適用 (Apply patch)] オプションを使用してプライマリ ノードをアップグレードします。

(注) すべての Cisco UCS Director サービスが開始し、Cisco UCS Director が利用可能になり、ログイン画面が表示されて管理者ユーザが Cisco UCS Director にログインできるようになるまでは、パッチ プロセスは完了または成功しません。

追加パッチの適用、データベースのバックアップ、バックアップからのデータベースの復元など、すべての Cisco UCS Director サービスは他の ShellAdmin プロシージャを実行する前に開始されている必要があります。

ステップ 13 サービス ノードとプライマリ ノードですべてのサービスが開始されていることを確認します。

ステップ 14 アップグレードが完了したら、すべてのノードで Cisco UCS Director ShellAdmin のバージョンとビルドが Cisco.com からダウンロードしたパッチのバージョンとビルドと一致することを確認します。バージョンとビルドは次の場所で確認できます。

- シェル メニューのタイトルの下
- ShellAdmin の [バージョンの表示 (Show Version)] オプション

Cisco UCS Director Baremetal Agent のアップグレード

Bare Metal Agent のリリース 6.5 へのアップグレード

はじめる前に

Cisco UCS Director をリリース 6.5 にアップグレードします。

- ステップ 1** 既存の Bare Metal Agent VM に対する Bare Metal Agent リリース 6.5 パッチをダウンロードします。
- ステップ 2** 後述するデフォルトの root クレデンシャルまたはシステム用の root クレデンシャルを使用して PuTTY または他のセキュア シェル (SSH) クライアント経由で Bare Metal Agent コンソールにログインします。
- ```
Username: root
Password: pxebboot
```
- ステップ 3** /opt/infra ディレクトリに移動し、**StopInfraAll.sh** を実行してサービスを停止します。
- ステップ 4** パッチ ファイルを解凍します。
- ステップ 5** 解凍したファイルのディレクトリに移動します。
- ```
cd ucsd_bma_patch_6_5_0_0
```
- ステップ 6** **./applyPatch.sh** を実行して、Bare Metal Agent にパッチを適用します。
- ステップ 7** インストールが完了するまで待ちます。
- ステップ 8** /opt/infra ディレクトリに移動します。
- ステップ 9** **./showBMAVersion.sh** を実行して、Bare Metal Agent の正しいバージョンがインストールされていることを確認します。
- ステップ 10** **startInfraAll.sh** を実行して、Bare Metal Agent サービスを開始します。
- ステップ 11** **statusInfra.sh** を実行して、Bare Metal Agent サービスのステータスを確認します。
- ステップ 12** Bare Metal Agent を 6.0.0.0 から 6.5.0.0 にアップグレードする場合は、アップグレードが完了するまで待ちます。Bare Metal Agent アプライアンスが起動したら、5 分待ってから Bare Metal Agent コンソールで次のコマンドを実行します。
- ```
setsebool -P samba_export_all_ro=1 samba_export_all_rw=1
find /opt/cnsaroot/templates/ -name "Win*" -exec ln -s '{}' /var/www/html/ \;
```
- ステップ 13** Bare Metal Agent を 6.0.1.0 から 6.5.0.0 にアップグレードする場合は、アップグレードが完了するまで待ってから Bare Metal Agent アプライアンスをリブートします。Bare Metal Agent アプライアンスが起動したら、5 分待ってから Bare Metal Agent コンソールで次のコマンドを実行します。
- ```
setsebool -P samba_export_all_ro=1 samba_export_all_rw=1
find /opt/cnsaroot/templates/ -name "Win*" -exec ln -s '{}' /var/www/html/ \;
```
- ステップ 14** Cisco UCS Director リリース 6.5 にログインして、[管理 (Administration)] > [物理アカウント (Physical Accounts)] > [Bare Metal Agent] の順に選択します。
- (注) Cisco UCS Director をリリース 6.5 にアップグレードしていない場合は、**/opt/infra-bin/syncDbCredentialsToBMA.sh** を Cisco UCS Director アプライアンスから実行する必要があります。

- ステップ 15** アップグレードした Bare Metal Agent のアカウントを選択します。
システムに複数の Bare Metal Agent インスタンスが存在する場合は、IP アドレスで正しいアカウントを識別できます。
- ステップ 16** Bare Metal Agent アカウントが Cisco UCS Director から到達可能であることを確認してから、そのアカウントのサービスを停止して開始します。
-

Cisco UCS Director PowerShell Agent のアップグレード

Cisco UCS Director PowerShell Agent のダウンロード

Cisco UCS Director からネイティブ Windows マシンに PowerShell Agent のインストーラをダウンロードします。

- ステップ 1** [管理 (Administration)] > [仮想アカウント (Virtual Accounts)] を選択します。
- ステップ 2** [PowerShell エージェント (PowerShell Agents)] をクリックします。
- ステップ 3** [インストーラのダウンロード (Download Installer)] をクリックします。
- ステップ 4** [エージェント インストーラをダウンロードします (Download Agent Installer)] ページでインストール要件の一覧を確認します。PowerShell Agent をインストールする Windows マシンでそれらが利用可能であることを確認します。
- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。
PSASetup.exe ファイルがネイティブ Windows マシンのデフォルトのダウンロードフォルダにダウンロードされます。
-

次の作業

Cisco UCS Director PowerShell Agent を Windows マシンにインストールします。

Cisco UCS Director PowerShell Agent のインストール



- (注) Cisco UCS Director の PowerShell Agent の現在のバージョンを Windows マシンにインストールしない場合、[PowerShell エージェント (PowerShell Agents)] タブの一部のタスクやオプションを利用できません。
-

はじめる前に

- このタスクを実行するには、システム管理者権限が必要です。
- WinRM を有効化します。
- ファイアウォールを設定します。

-
- ステップ 1** 必要に応じて、Cisco UCS Director からダウンロードした PSASetup.exe ファイルを対象の Windows マシンにコピーします。
- ステップ 2** PSASetup.exe ファイルをダブルクリックします。
- ステップ 3** [Cisco PSA サービス - InstallShield ウィザード (Cisco PSA Service - InstallShield Wizard)] 画面で、[次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 4** [プログラムをインストールする準備ができました (Ready to install the Program)] 画面で、[インストール (Install)] をクリックします。
インストール中は [Cisco PSA サービスをインストール中 (Installing Cisco PSA Service)] 画面が表示されます。インストールが完了すると、「InstallShield ウィザードが完了しました (InstallShield Wizard Completed) 」というメッセージが表示されます。
- ステップ 5** [終了 (Finish)] をクリックします。
PowerShell Agent が C:\Program Files (x86)\Cisco Systems\Cisco PSA Service フォルダにインストールされます。残りのドキュメントでは、このフォルダは %AGENT_INSTALL_FOLDER% として参照されます。
- ステップ 6** リソース モニタをチェックして、Cisco PSA サービスが Windows マシン上で実行されていることを確認します。
-

Cisco UCS Director SDK のアップグレード

Cisco UCS Director Open Automation からリリース 6.5 へのアップグレード

次の手順では、Eclipse 開発環境を使用していると仮定します。Open Automation プロジェクトに別の開発環境を使用する場合は、その環境に適切な手順を実行します。

-
- ステップ 1** Cisco UCS Director SDK バンドル リリース 6.5 を Cisco.com からダウンロードします。
- ステップ 2** Eclipse にプロジェクトをインポートします。
- ステップ 3** Open Automation の実行を理解するために利用可能な例を実行します。これらの例は、com.cisco.cuic.api.examples にあります。
-

Cisco UCS Director REST API からリリース 6.5 へのアップグレード

次の手順では、Eclipse 開発環境を使用していると仮定します。REST API プロジェクトに別の開発環境を使用する場合は、その環境に適切な手順を実行します。

-
- ステップ 1 Cisco UCS Director SDK バンドル リリース 6.5 を Cisco.com からダウンロードします。
 - ステップ 2 Eclipse にプロジェクトをインポートします。
 - ステップ 3 REST API の実行を理解するために使用可能な例を実行します。CCO リンクから OA の ZIP ファイルをダウンロードし、ファイルを解凍して、Eclipse に OA の例をインポートできます。
-

カスタム タスクのアップグレード

Custom Task Script Analyzer

Custom Task Script Analyzer は、カスタム タスクに組み込まれている Cloupiascripts のすべてのクラスとメソッドを分析し、Cloupiascript で使用されているメソッドの完全な署名を提供します。アナライザはタスクを実行せずに Cisco UCS Director データベースのすべてのカスタム スクリプトを評価し、分析レポートを出力します。

分析レポートには、カスタム タスクの状態（たとえば、Executed または Not executed）、カスタム タスクで使用されるメソッドの一覧、および現在のバージョンのメソッドと互換性がないメソッドの一覧が含まれています。分析ファイルを使用して、アップグレードする前に、Cloupiascripts の潜在的な互換性の欠如の問題を検出できます。

Custom Task Script Analyzer の設定

Custom Task Script Analyzer は、script-analyzer.tgz という名前の圧縮 tar ファイルとして Cisco UCS Director に含まれます。

-
- ステップ 1 シスコのソフトウェア ダウンロード エリアから script-analyzer.tgz ファイルをダウンロードします。
 - ステップ 2 script-analyzer.tgz tar ファイルを /opt ディレクトリにコピーします。
(注) /opt 以外の任意のディレクトリに tar ファイルをコピーする場合は、tar ファイルと生成されるレポートを保存するためのフォルダを同じディレクトリの下に作成してください。

ステップ 3 /opt ディレクトリの下にフォルダを作成します (例: csatool)。

ステップ 4 次のコマンドを使用して script-analyzer.tgz tar ファイルを csatool フォルダに解凍します。

```
[root@localhost opt]# tar -zxvf script-analyzer.tgz -C csatool
```

次のファイルが csatool フォルダに解凍されます。

- data フォルダ: このフォルダには、JSON 形式の API 定義ファイルが含まれています。Custom Task Script Analyzer はこのファイルを使用して、現在のバージョンのメソッドと互換性がないメソッドを識別します。
- jre1.8.0_121 フォルダ
- lib フォルダ
- analyzer_config.properties ファイル
- run-analyzer.sh ファイル
- script-analyzer.jar ファイル

ステップ 5 analyzer_config.properties ファイルを編集して、次のプロパティを設定します。

```
# Path for the inframgr.jar file
inframgrJarPath=/opt/infra/inframgr/inframgr.jar
#Path for the lib directory where all dependencies could be found.
From Cisco UCS Director release 6.5,the libDirPath is /opt/infra/lib.
For releases prior to 6.5, the libDirPath is /opt/infra/inframgr.
libDirPath=/opt/infra/inframgr
# Path for the API definition file in the JSON format which is available in the data folder
inframgrJSONDefinitionPath=data/inframgr_6500.json
# Directory where the generated analysis report would be written
reportDirPath=output
# Directory for the JavaScript files. The JavaScript files containing the
CloupiaScripts are fetched using the --fetch-scripts command.
jsFileOrDirPath=javascripts
# JDBC connection URL
db.url=jdbc:mysql://localhost:3306/db_private_admin
# Database user
db.username=root
# Database password
db.password=cloupia
# JDBC driver
db.driver=com.mysql.jdbc.Driver
```

(注) これは Cisco UCS Director リリース 6.5 より前のバージョンでのみサポートされま
す。

ステップ 6 analyzer_config.properties ファイルを保存して閉じます。

Custom Task Script Analyzer を使用したカスタム タスクの分析

端末から Cisco UCS Director に接続して、端末から Custom Task Script Analyzer を実行できます。Custom Task Script Analyzer を実行するために使用できるコマンドを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
[root@localhost csatool]# ./run-analyzer.sh --help
次のコマンドを使用できます。
```

- **fetch-scripts** : データベースからスクリプトを取得します。デフォルトでは、このオプションは True に設定されています。
- **file** : 処理する JavaScript ファイルのパスを指定します。
- **help** : コマンドライン メニュー オプションを表示します。

ステップ 1 端末を開き、Cisco UCS Director に接続します。

ステップ 2 すべてのカスタム タスクの分析レポートを生成するには、次のように `--fetch-scripts` コマンドを使用して Custom Task Script Analyzer を実行します。

```
[root@localhost csatool]# ./run-analyzer.sh --fetch-scripts
このコマンドを実行すると、次のものを取得します。
```

- カスタム タスクおよび Cloupia スクリプトの実行ライブラリ タスクで作成されたタスクのすべての CloupiaScripts の JavaScript ファイル。JavaScript ファイルは、対応するバイトコードテキストファイルとともに、`analyzer_config.properties` ファイルの `jsFileOrDirPath` キーで指定された `javascripts` フォルダに保存されます。
- `analyzer_config.properties` ファイルの `reportDirPath` キーで指定された `output` フォルダ内の分析レポート。

デフォルトでは、これらのフォルダは `/opt/csatool/`、または `analyzer_config.properties` ファイルで設定したいいずれかのパスで作成されます。

(注) 次の場合、`javascripts` および `output` フォルダ内のレポートには、末尾にタイム スタンプが付きます。

- `--fetch-scripts` コマンドが複数回実行された場合。
- `javascripts` フォルダと `output` フォルダが `csatool` フォルダにすでに存在し、これらのフォルダが空でない場合。

ステップ 3 `javascripts` フォルダ内のすべての JavaScript ファイルの分析レポートを生成するには、次のように `--file` コマンドを使用して Custom Task Script Analyzer を実行します。

```
[root@localhost csatool]# ./run-analyzer.sh --file javascripts
```

このコマンドは `javascripts` フォルダ内のすべての JavaScripts の分析レポートを生成し、`analyzer_config.properties` ファイルで設定された出力フォルダに分析レポートを保存します。

ステップ 4 javascripts フォルダ内の 1 つの JavaScript ファイルの分析レポートを生成するには、次のように `--file` コマンドを使用して Custom Task Script Analyzer を実行します。

```
[root@localhost csatool]# ./run-analyzer.sh --file javascripts/Change_VM_Max_Boot_Wait_Time.js
```

ここで、`Change_VM_Max_Boot_Wait_Time.js` は javascripts フォルダ内の javascript ファイルです。このコマンドは javascripts フォルダ内の `Change_VM_Max_Boot_Wait_Time.js` の分析レポートを生成し、`analyzer_config.properties` ファイルで設定された出力フォルダに分析レポートを保存します。

分析レポートには、次の詳細情報が含まれます。

- `taskLabel` : Custom Task Script Analyzer によって分析されたカスタム タスクの名前。
- `workflowList` : カスタム タスクが使用されたワークフローの一覧。
- `status` : Executed または Not executed。 `workflowList` のいずれかのワークフローが少なくとも 1 回実行された場合、ステータスは Executed として表示されます。
- `usedMethodsList` : カスタム タスクで使用されるメソッドの一覧。
- `incompatibleMethodsList` : 現在のバージョンのメソッドと互換性がないメソッドの一覧。

次に、分析レポートのサンプルを示します。

```
{
  "taskLabel": "Change_VM_Max_Boot_Wait_Time",
  "workflowList": [
    "Provision_VM",
    "UpdateVM"
  ],
  "status": NotExecuted,
  "usedMethodsList": [
    "public static com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile
com.cloupia.service.cIM.inframgr.InfraPersistenceUtil.getPrivateCloudSystemProfile(java.lang.String)
throws java.lang.Exception",
    "public int
com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile.getLinuxVMMaxBootTime()",
    "public void
com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile.setWindowsVMMaxBootTime(int)",
    "public static boolean
com.cloupia.service.cIM.inframgr.InfraPersistenceUtil.modifyPrivateCloudSystemProfile
(com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile) throws
java.lang.Exception",
    "public void
com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile.setLinuxVMMaxBootTime(int)"
  ],
  "incompatibleMethodsList": [
    "public static com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile
com.cloupia.service.cIM.inframgr.InfraPersistenceUtil.getPrivateCloudSystemProfile(java.lang.String)
throws java.lang.Exception",
    "public void
com.cloupia.service.cIM.inframgr.profiles.PrivateCloudSystemProfile.setWindowsVMMaxBootTime(int)"
  ]
}
```

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <http://www.cisco.com/go/trademarks>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1110R)

このマニュアルで使用している IP アドレスおよび電話番号は、実際のアドレスおよび電話番号を示すものではありません。マニュアル内の例、コマンド出力、ネットワークトポロジ図、およびその他の図は、説明のみを目的として使用されています。説明の中に実際のアドレスおよび電話番号が使用されていたとしても、それは意図的なものではなく、偶然の一致によるものです。

© 2017 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.